

何冊かの本の僕なりの書評 #1

『ユリシーズの謎を歩く』 結城英雄著、集英社

まだ読み終わっていません。勿論『ユリシーズ』もです。『ユリシーズ』は多くの人がそうでしょうが、最初から読み始めて挫折するケースが非常に多い小説です。Hélène Combisというフランス人のジョイス研究家によると、最初から読むな、とのこと。ではどこから?かの女によると、最後のエピソード、つまりモーリーの独白からはどうか、とのこと。僕は邦訳、英文を並行して読んでいますが、ご存知の方も多いでしょう、このエピソードには句読点は一切ない。「意識の流れ」とはこういうものなのか? 確かにこのエピソードは、テキスト内、テキスト外(『ユリシーズ』には聖書、ギリシャ神話、ソクラテス、プラトン、アリストテレス等古典、シェークスピア、いわゆる倒錯的と呼ばれるもの - たとえば、ナルシスム、近親相姦、インキュニスム - それとこの小説が及ぼした影響ということで、ナボコフの『ロリータ』は重要です - 等々が関係している書物、一部の言語学、音楽、政治、医学、神学等々に関する書物からの引用 - ジョイス自身の他の作品からの引用も含め - への言及があり、あるいは行間に隠されていたりして、この絡み合いを読み解かなくてはならないのですが)の引用に拘らなく読むことはできる。夫、つまりアラン・ブルーム外出中における他の男との情事、つまり不倫について

ての回顧とかの女の結婚観が中心的テーマとなっている
とっていいであろうが、僕としては、「身につまされる
思い」といったところであろうか、つまりブルームに
同一化しているのです。浮気に関していうと、男性は大
抵の場合、これを「本気」と思ってしまい、夫婦関係に
おける日常生活のなかで、疾しさから来る、ふとした言
動(例えば、妻が作ってくれた料理に対する食欲減退)に
対して妻=女性は目聡く、つまり、すぐバレルのです。
女性の方が、一言でいうと(浮気に関していえばです)、
凶々しい。禁断の実であるリンゴを食べようとしたと
き、神の声を聞き、アダムは喉につまらせます。この結
果、男性にはAdam's apple(甲状軟骨の隆起部分)があ
り、女性はこれが目立ちません。イヴはリンゴをすっか
り飲み込んでしまったからです。

前書きが長くなってしまいました。本書は「歩く」と
いう文字が入っていて、事実、地図や写真が載っていて
(これが『フィネガンズ・ウェイク』を読む上でも参考
になるのですが、僕は、さすがにこちらは読むことが不
可能と諦めています)、例えば、ブルームがこの一日、
ダブリン市をどのように移動したのか、ある種体感を通
じて『ユリシーズ』を読み解くという試みでもあり、こ
のコロナ禍が一件落ち着いたら、僕も一度ダブリンを訪
れ、本書等を片手に(とはいかないであろう。『ユリシ
ーズ』英文オリジナル - ふたつの版をもっていますが、
ひとつはエピソード別にはなっていないので読み辛い、

amazon.co.uk上にはこれら以外のいくつもの版があるので、さらに買っていき最終的にはこれらのどれかを選ぶ。邦訳は完訳とされている丸谷才一等の訳(集英社)がどういうわけか第9エピソードが欠けており、柳瀬尚紀訳(河出書房新社)は第1～第12エピソードまで一冊に収まっている。この一冊と集英社版文庫II～IV。いくつかの解説本 - 既に日本語、英語、フランス語で書かれた多くの解説書を買っ込んである - も含めてパイロット・ケースに入れて、要所要所で立ち止まり、写真も撮り...これをやるには数日かかるでしょう)ブルームの一日を足脚で実感したいと思っています。ラカン(セミネールXXIIIは)はあえて無視します。ラカンの英語力は眉唾もので、ラカン自身は多分大部分仏訳を読んでこのセミネールをやったんだと思います。traduction est trahison(翻訳は裏切りだ)と嘯っています。かれの読解(よみ)はあくまでかれのものとしておきます。それよりも、アリストテレスの『靈魂論』におけるL'homme pense avec son âme(人間は自己の魂で考える)の向こうを張って、L'homme pense avec ses pieds(人間は足で考える)とはよく言ったもので、ペリパトス派を茶化しているのですが、単なる茶化しではないでしょう。歩きながら考える、というより、歩くスピードで景色を見ると、車を運転してでは見えないものが見えてきて、それについて考えるのです。

何故『ユリシーズ』かと問われれば、最終目標は第9エ

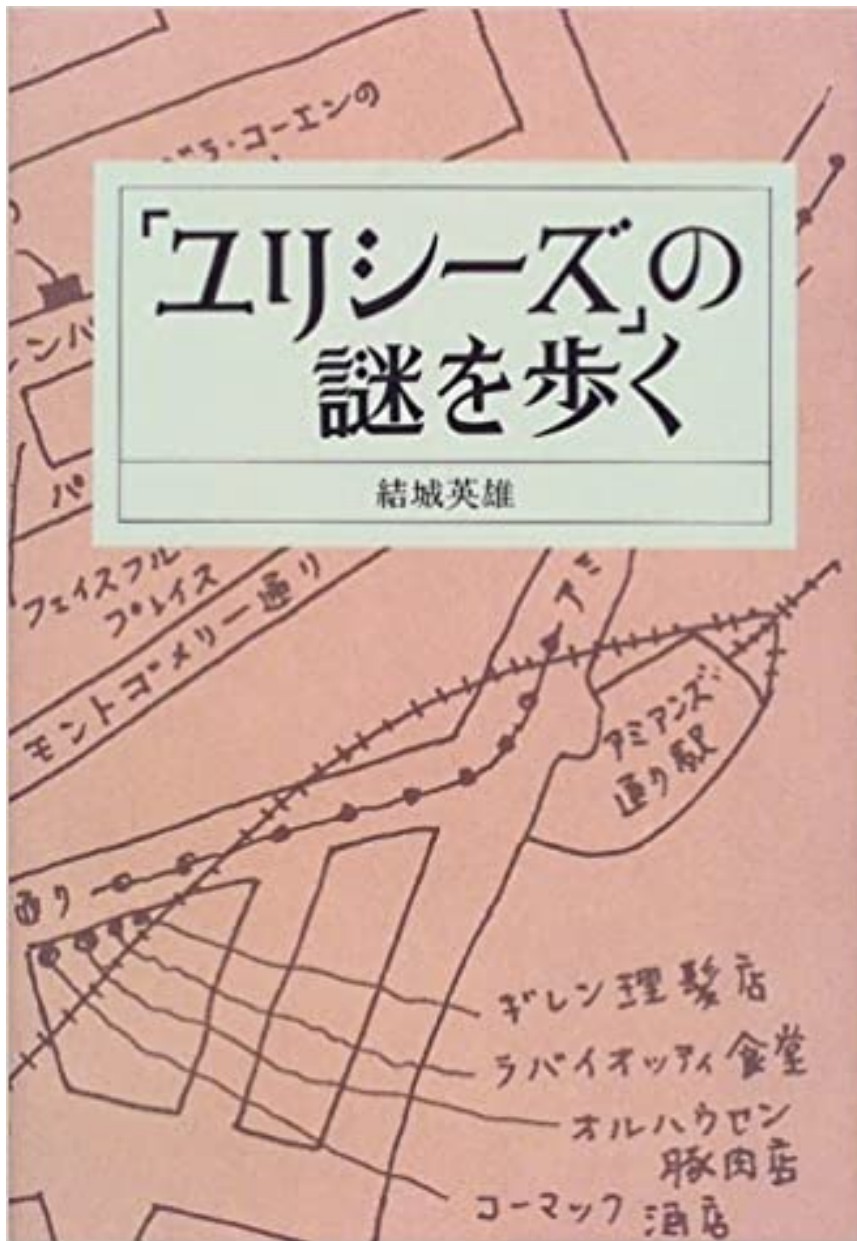
ピソードをきちんと読むためです。スティーヴン(ジョイスの分身とっていいでしょう)が国立図書館で、Hamlet論というよりシェークスピア論を展開しているからです。ジョイスはシェークスピアはHamletの父親、つまり亡霊に同一化している、とのようなことを言っています。ケネス・ブラナーの映画で『シェークスピアの庭』(原題All is true)をamazon primeで観ましたが、テーマとなっているのが、妻アン・ハサウェイとのあいだに生まれたとされる双子(二卵性双生児だったのでしょう)の片方、男児であるHamnetの死に対する父親としての喪の仕事で、その仕事とは「書く」ことではなく、筆を折り、故郷のストラットフォード・アポン・エイボンへ戻り、家族と一緒に暮らしながら、「庭」造りをする事なのですが、双子のもう一方Judithが、Hamnetの詩作と思い込み、それゆえ最愛の子の死に嘆き悲しむ様を見、自分の方を振り向いてくれもしない父シェークスピアに、ある日、その詩は自分が書いたものであることを告げます。同時にカメラはHamnetの死因は入水自殺であるかのような暗示的描写として湖を写し、これはブラナーが、オフェーリアにダブらせているものと思えました。アン・ハサウェイについては、無教養ながら貞節な妻として描いています。ジョイスはそうはみていなかったものと確信しています。シェークスピア研究家は数え切れないほどいるが、アン・ハサウェイは映画で描かれているように自分の名も書けない無教養な女である

はずはなく、一方で貞淑とは言い難いがゆえ、シェークスピアのかの女に対する遺産が2番目に良いベッドだったのは不貞への当て付けだったとする向きもある。あるいは、双子についても、実の父親はシェークスピアではなかったという分析も可能であり、これが悲劇とされるHamletにおける亡霊のHamletに対する命令である父親(の名もHamlet)の毒殺の真犯人であろうポロニアスへの復讐への「躊躇」の説明にもなる説、「Hamletの実の父親はポロニアスであった」に結びつく。ガートルードの不貞については説明を必要としないであろう。僕の立ち位置が今ここにあるということを示すため、この本を挙げました。精神分析において、ハムレットの亡霊についてはラカンは大したことを言っていない。

Nicolas AbrahamとMaria TorokのL'ecorce et le noyauの終章の最後の部分がLe fantôme d'Hamlet ou le VI^e acte, précédé par l'entr'acte de la «vérité» (par Nicolas Abraham)「ハムレットにおける亡霊、あるいは『真実』が示される劇中劇に続く第6幕」以来、亡霊はかれ等の唱える「クリプト」との関係で、今もpsychanalyse transgénérationnelle「世代を跨ぐ精神分析」でも重要なタームとなっています。日本語では「親の因果が子に子に報う」がぴったりですが、誰にでも祖先の傷が文字通り心的外傷となっているところがあります。

これはまだ読み始めてもいないのですが、日本では紹介

もされていないRichard Kearneyという解釈学の系譜に連なる人がStrangers, Gods and Monstersという本のなかでHamlet's Ghosts - from Shakespeare to Joyceという章を設けて論じています。そのうち取り上げる予定です。



Amour de l'œuvre d'André Green, sous la direction

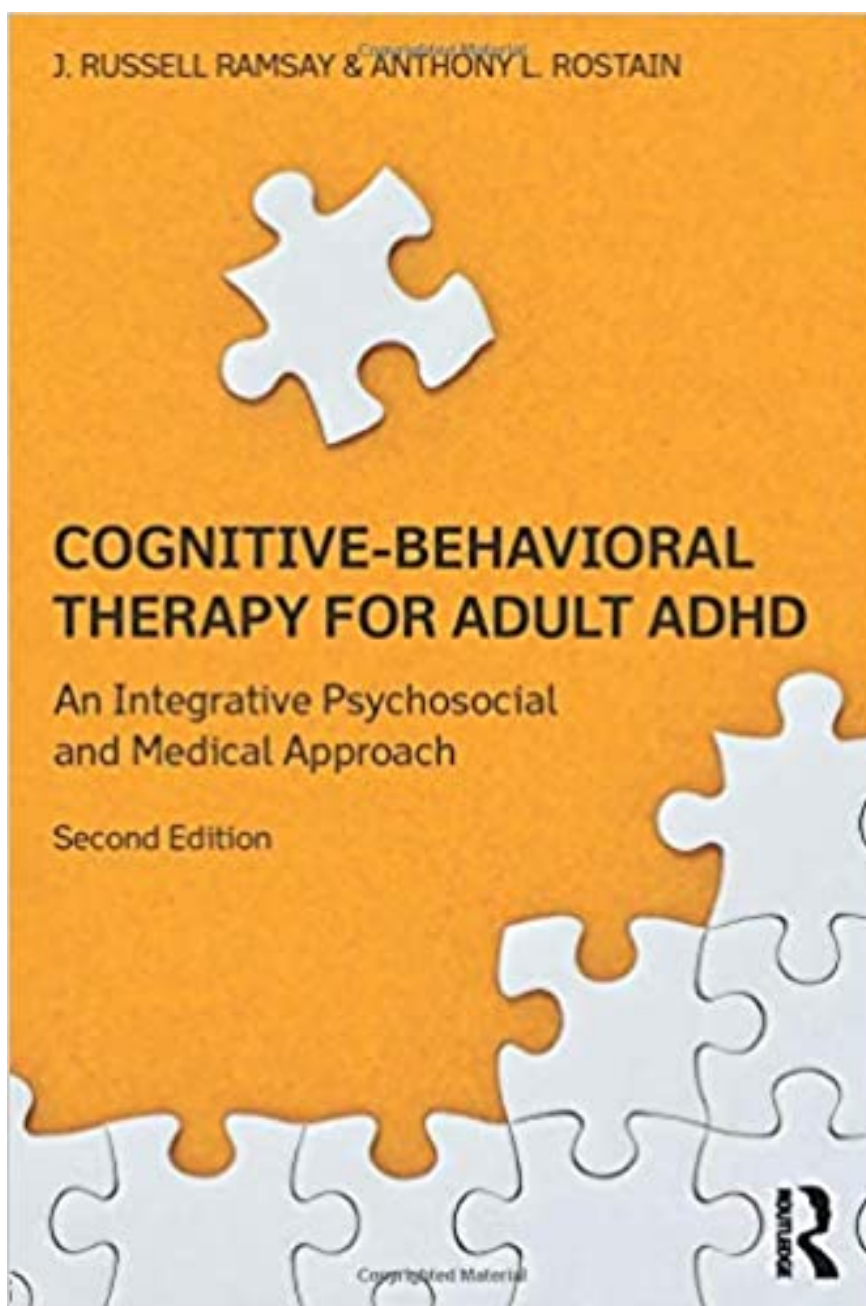
de François Richard et Fernando Urribarri, 論文集。
クリステヴァまで寄稿している。総じて「Greenは正しくLacanは間違っている」式に書いている。Gilbert DiatkineのLacan批判の部分を試訳としてアップしました。

sous la direction de
FRANÇOIS RICHARD
et FERNANDO URIBARRI
Autour de l'œuvre
d'André Green
Enjeux pour
une psychanalyse
contemporaine

puf

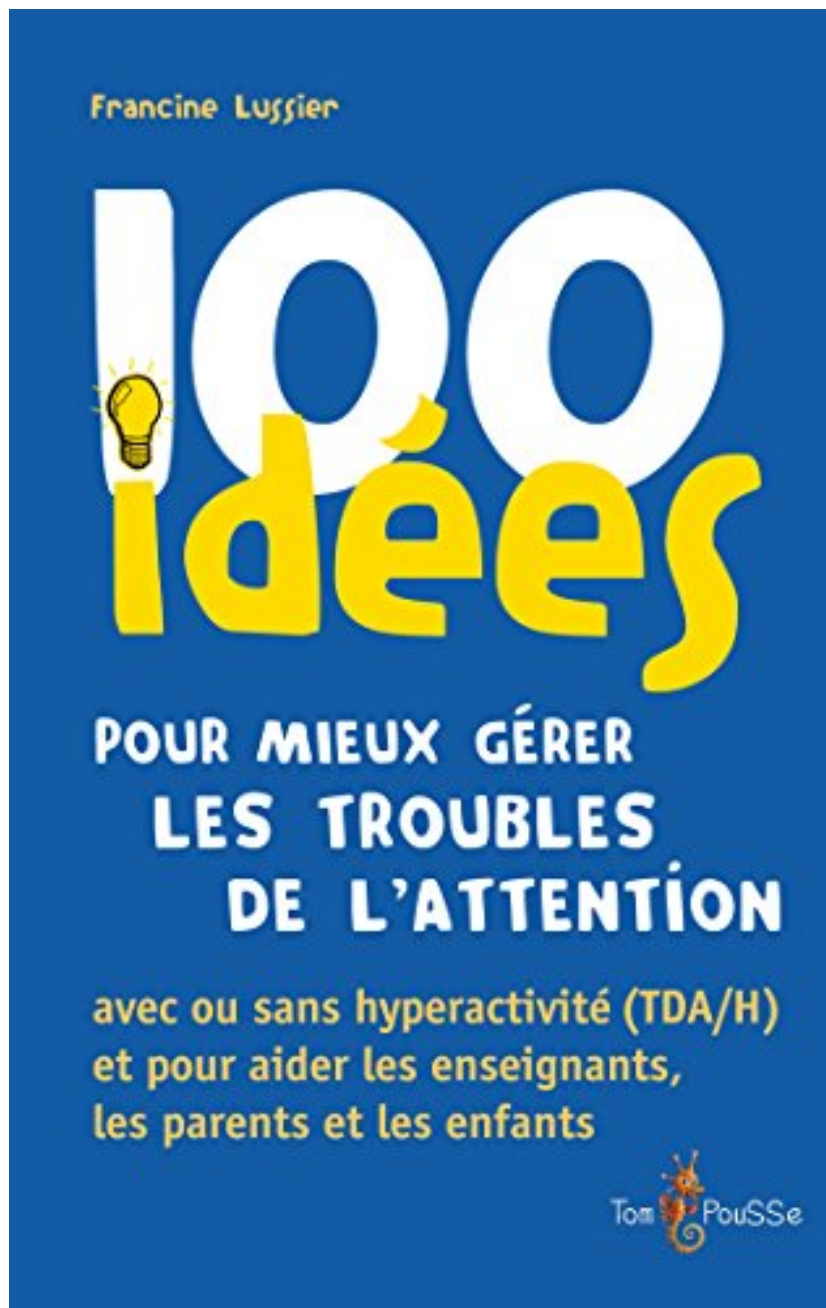
Cognitive-Behavioral Therapy for Adult ADHD: An Integrative Psychosocial and Medical Approach, by Russel Ramsay, よくもこんなもんpaperbackで\$44.95までの値段で売っていてratings★★★★★引用の引用で成り立っていて、症例報告も中学生ぐらいの作文程度のレベル。悔しくて足で踏んづけたら、このカヴァ

一の汚い黄土色が僕の白いスニーカーに付いてまた損を
してしまった。僕が一寸期待していたのは
…Psychosocial…というサブタイトル。とにかく内容が
空虚です。



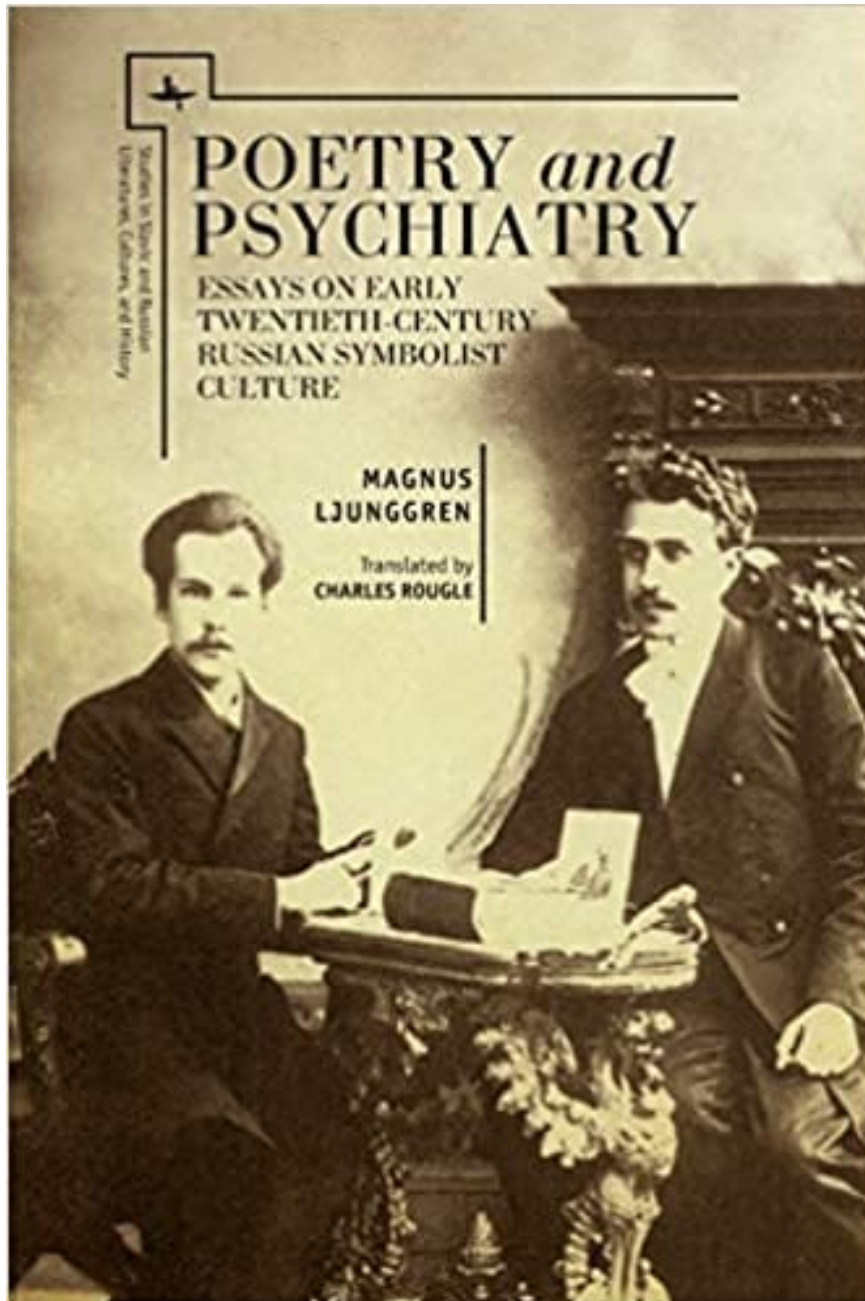
100 idées pour mieux gérer les troubles de l'attention avec ou sans hyperactivité (TDA/H) et pour aider les enseignants, les parents et les enfants,

この本は以前取り上げたことがあります、チョコチョコと読んでいたので再掲です。著者はADHDでこの100 idéesはシリーズ本の一冊でho-toものです。タイトルは「ADHDとうまく付き合っただけゆえ、あるいはADHDの子どもをどのように教育したり、育てていけばいいのか100つのアイデア」といったところでしょうか。ある意味便利な本かもしれません。さすがにADHDの人(結構有名な人となっているようです)が書いたものだけあって、日本人である僕が読んでいても、すぐ気づく初歩的な文法上の間違いが散見されますが、日本と違って、ここら辺は「愛嬌」として受け入れられています。日本の社会はADHDの人にとって極めて不寛容にできています。



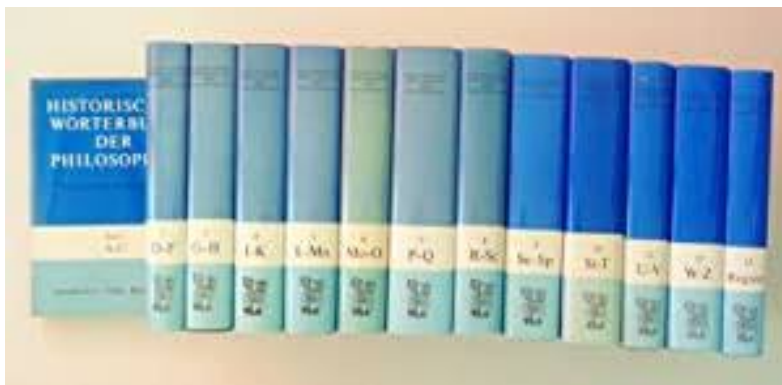
Poetry and Psychiatry - Essays on early twentieth-century Russian Symbolist Culture, この本はミステリアスです。著者はMagnus Lyunggren, ポーランド、ワルシャワで上梓されたのにポーランド語からの英訳とはなっていない。内容は至って明解ではある。精神分析がドイツ語圏(ウィーンとチューリッヒを中心として)以外

で普及したのは当時のロシアだったのです。「狼男」(セルゲイ・パンキェエフ)の影響も大だったようですが、サビーナ・シュピールレイン(ドイツ語読みでザビーナ・シュピールライン)は精神病の研究、夢について、とりわけ子どもの精神分析について、多くはドイツ語で書かれた論文を残しており(勿論ほとんどはロシア語訳ができています)、ロシア(当時のソ連)に帰国してからは、面上は医師(いわゆるジェネラリスト)として通していたが、実際は不良少年や「むづかしい」子どもの精神分析を実施していたと書かれている。映画『危険なメソッド』(通俗的な作品ですが、この映画で僕はかの女の存在を知りました)はかの女の一面に過ぎません。歴史的にみると、フランスは精神分析後進国でした。マリー・ボナパルトみたいなヘンテコな考え(例えば、冷感症の女性はxxとxxとの長さが長い...など)をする女性が牛耳っていたのであるから。FreudのŒuvres Complètes完訳が1988年で、この仏訳の出来がすこぶる不評を買っていることからやはりLacanの存在が際立ってしまうのでしょうか。



Historisches Wörterbuch der Philosophie, ‹全13冊-
Band 13は索引›, 哲学用語について(精神分析だと
Metapsychologieの項はあるが、
Vorstellungsrepräsentanzはない。勿論Vorstellungにつ
いては、10ページにわたってクロノロジカルに語義、定

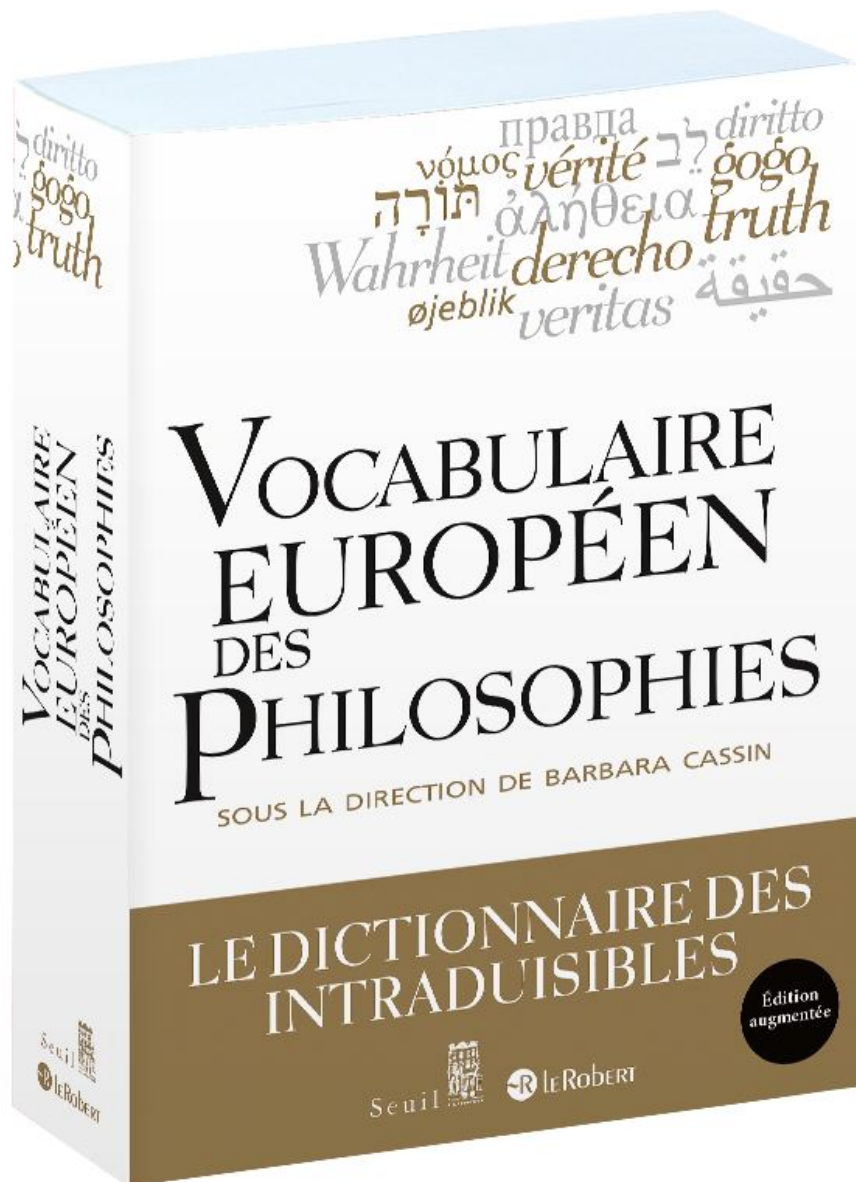
義、概念の変遷が記述されています。Freudについての記述はなく、Wundtについては若干書かれています)。最新版は2019年版でamazon de., amazon fr., amazon co.ukで品切れ、amazon com(米国)で予約販売\$440.00。因みに、2007年版が新中古でamazon deにて2.235,00ユーロで新中古、中古は1.297,55ユーロでクリックすると米国からshippingとあった。僕がこれを崇文荘で購入したときは、covid-19の影響で国際線の便数が激減し、その分、もちろんチケット代も跳ね上がり、ANAで成田-パリ、エコノミーで40万、シンガポールに行くのにも27,5万掛かるとのことでしたが、煽りで海外のamazonでのお買い物も送料が高騰し、国内で買う方がずっとお得になっていました。¥80,000プラス消費税でほぼ新品同様。買って満足です。調べものをするのに重宝しそうですので。



Vocabulaire Européen des Philosophies, こちらはそれ程テツガクーツという内容ではないですが、ヨーロツ

パ諸言語のタイトルで記事(は勿論フランス語)で書かれており、多分最新の項がMaidan(2013-14のウクライナ、キエフから始まった騒乱)。ベラルーシのデモがのちにどのように書かれることとなるのかはこれからの問題。僕的にはルカシェンコは独裁者というよりは、見当違いなアナクロニズムに取り憑かれてはいるものの、呑気な父さんという感じ。国営企業を私物化しているエリートが糾弾されるべきなのだと思います。この国にはナショナリズムはまったく育たない。一方で旧ソ連のままだから。もう一方でミンスクの住人たちはベラルーシ語が田舎臭い言葉だと馬鹿にしているロシア語しか喋ら(れ)ないから。ルカシェンコ自身が言うように、重要な言語はロシア語と英語だけとされてる。スカリーナという聖人(?)がルターよりも少し早く、聖書を国民言語(といっても今のベラルーシはそれからリトアニアだったりポーランドだったりで、Nation-Stateに目覚めたことは未だかつてなかったまま、ソ連崩壊後もソ連のままなのです)たるベラルーシ語に翻訳している。誇り高き言語であって然るべきなのに。Maidanの方は当時NulandとかMcCainとかが暗逆していて、その系譜に連なるのがBidenファミリーといってもいいのではないか。共和党、民主党の区別なくエスタブリッシュメント側に付いていて、国営だろうが、民営だろうがトンネルだろうがともかく企業を食い物にし、あるいは、企業を通じてマネー・ロンダリングに加担しているとんでもな

い連中だと思えます。ロシアはオルガリヒにがっぽり持っていかれた。ロシア国民はだから強い指導者を望み、プーチンは、これからも形を変えてもナンバー・ワンに止まる。因みにこの辞書にはSvovoda(通常「自由」と訳されている)の項目もあり、ロシア語のВоля(「意志」の語義に近い)と重なる部分もあり、ドストエフスキーについても書かれており、「汝」と「隣人」との関係で愛と憎しみが絡んできます。まさにラカンのセミネール7巻の主要テーマのひとつに関わる事柄なのですが、Воляは人民としての人間意志として使われることがあり、侮蔑的な用法としてはポピュリスムの理想(現実 - 特にラカンのle réel - と理想を混同している輩がなんて多いことか!)も含意するとのことで、ウーンと考え込んでしまいました。



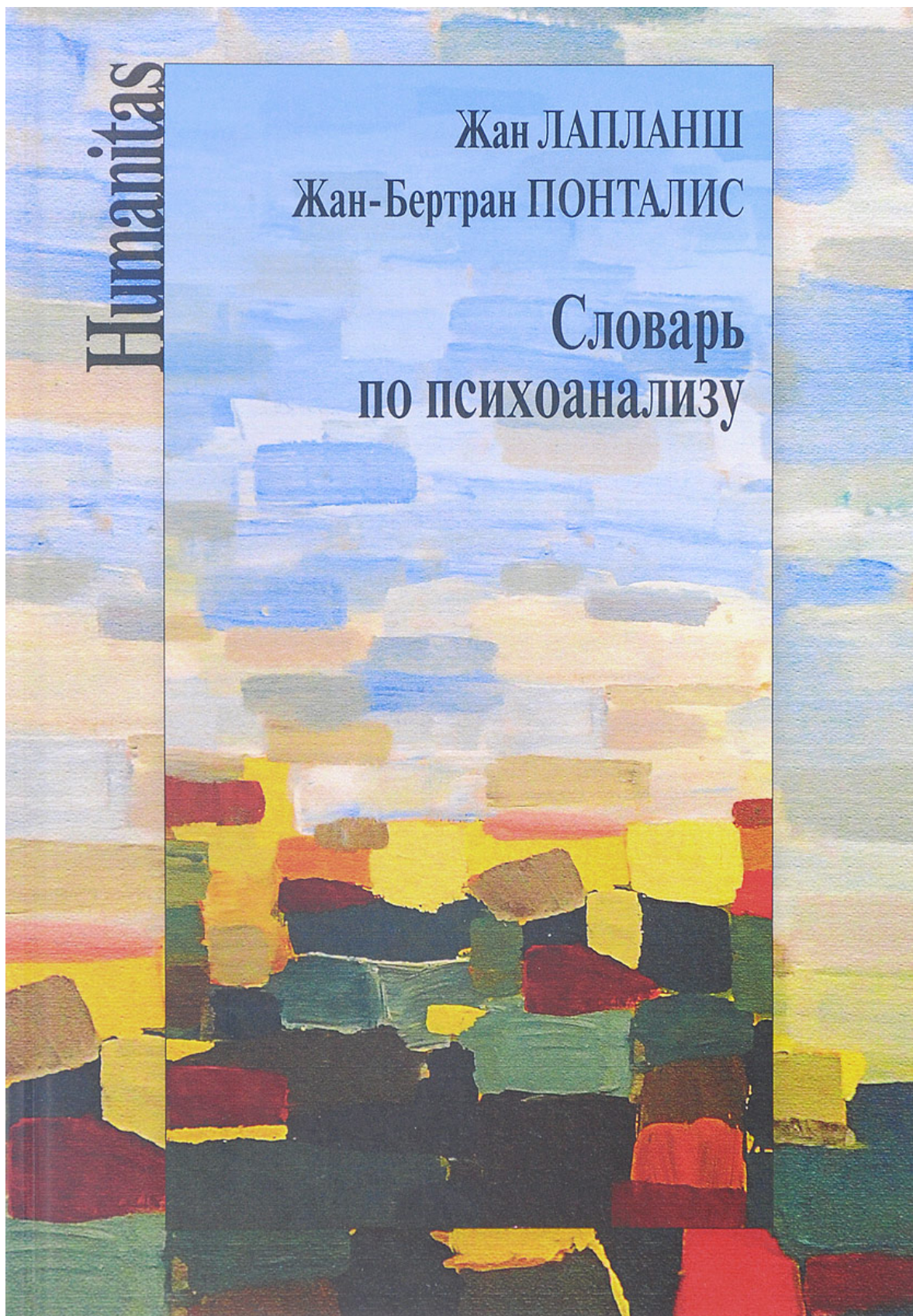
Словарь по психоанализу, 言わずと知れたJean Laplanche et Jean-Bertrand Pontailsの精神分析用語辞典のロシア語訳です。まだちゃんと読んでいないが、邦訳(ごく一部、かなりの誤訳があるが)同様丁寧に訳されているようで、索引も邦訳と同程度、いろいろ調べものをするには便利にできている(英訳 - これが最悪である)

う - 独訳 - Freudからの引用は勿論ちゃんとしている(僕の持っているものはTaschebuchなのだからだろうか、索引は手抜きでフランス語 - つまり原文 - がまったくくない)。このロシア語版を手に入れるのには一年以上かかりました。ナウカ書店に注文していたのですが、一向に音沙汰なしで何ヶ月か過ぎ、版元では品切れです、との一報。ではどこかロシアにある書店から買って下さい、と再注文。つい最近になってようやく入手できたのです。美本である。ラプランシュとポンタリスの写真まで写っていて、それぞれ略歴も書かれている。

Humanitas

Жан ЛАПЛАНШ
Жан-Бертран ПОНТАЛИС

Словарь
по психоанализу



和露辞典-Японско-Русский Словарь, こちらはface bookのグループКниги в Японии(букинист)を通じ、Kさんから¥500で譲ってもらった。日本のコンサイス和露辞典よりよくできているかもしれない。

